仙台空港の３０年後の将来イメージ
＜マスタープラン＞

2016.7

仙台国際空港株式会社

仙台空港民営化の目的を達成するためには

旅客数を増やす

- 交流人口の増加 → 地域活性化 風評被害払拭
- 機材の大型化 → 貨物量増加
- 空港経営の健全性 → 持続的な空港活性化 利用者本位の料金体系

仙台空港の将来イメージ

プライマリー・グローバル・ゲートウェイ

東北を発着する旅客に一番に選ばれる

東北で最も重要な航空貨物の拠点となる

旅客数の目標値

	現在	5年後（2020年度）	30年後（2044年度）
旅客	324万人	410万人	550万人
国内	307万人	362万人	435万人
国際	17万人	48万人	115万人
貨物	0.6万t	1万t	2.5万t

1. 路線を増やし、航空需要を増やす

航空ネットワークの拡充

国際線

- 4時間圏の直行便拡充
- 東アジアハブ路線の増便・大型化

国内線

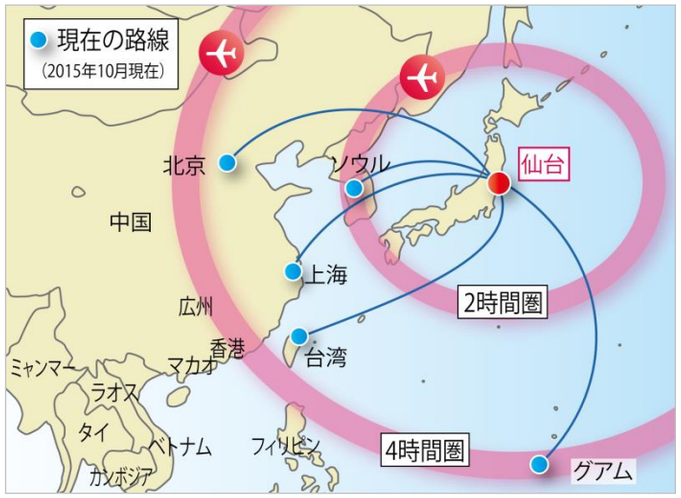
- FSC（フルサービスキャリア）路線維持
- 機材大型化
- LCC（格安航空会社）新規路線拡充

貨物

- ハブ空港への機材大型化・デイリー運航による輸送ルート確立
- 港湾と連携したトラックによる共同配送網確立
- 輸出支援策による貨物量の底上げ

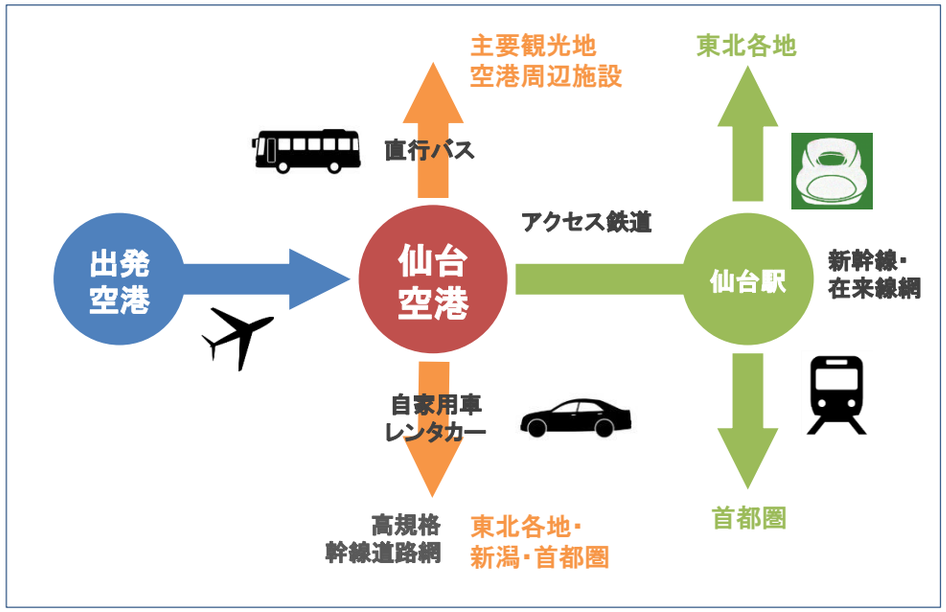
官民連携

- 仙台空港国際化利用促進協議会の活動活性化
- 地域と一体となった航空利用促進
- エアライン支援策（就航路線PR）の実施



マルチモーダルハブ

航空ネットワークと複数の交通ネットワークが集結し、円滑に接続される結節点となる



空港アクセスの利便性向上

- レンタカー駐車場 空港内設置により空港からのアクセス向上
- 駐車場の拡張 立体駐車場整備による混雑緩和
- 東北各地へのシャトルバス運行に向けた協議
- 仙台空港連絡協議会（仮称）を通じた鉄道ネットワークのアクセス利便性向上

料金施策と施設整備

基本的な考え方

- エアラインと空港の「協働」
- 旅客数・貨物量の増加促進
- エアラインの就航意欲を喚起

具体策イメージ

- 旅客数減少時にはエアラインの料金負担を軽減する料金体系
- 新規就航時等の割引制度
- エアライン・利用者負担に配慮した施設整備

東北ブランドの発信

東北ブランドとは

美しい四季のコントラスト　伝統文化　食の豊かさ

ゴールデンルートの形成促進

- 二次交通網整備
- 旅行商品開発 プロモーション

仙台空港からの東北ブランド発信

- 四季を感じる空港へ
- 特産品の催事販売
- ロケツーリズム促進

東急グループとの連携

- アジア商業施設での東北PR拠点化

仙台空港国際化利用促進協議会
東北観光推進機構との緊密な連携による
東北ブランド認知度向上に向けた取組の推進

2. 空港活性化と設備投資

「安心」「快適」「ホスピタリティ」の提供

国内最高レベルの旅客満足度の実現

インフラとしての「安心」、楽しく過ごせる「快適」、うれしい驚きと感動を与える「ホスピタリティ」の、利用者の感じる3つの体験価値を高め、国内最高レベルの旅客満足度を実現。

航空サービス利用者の利便性の向上

「空港利用者満足度調査」において、
「空港全体の総合満足度」8.5以上

十分な旅客取扱能力を確保するため、
設定した基準を満たした設備規模、設備数を設置

目標とする空港利用者の利便性向上の水準

一般利用者の年間来館者数170万人以上

旅客増加に先立つ
十分なキャパシティの増強

インフラの基本性能ともいうべき
旅客のキャパシティを計画的に拡充。

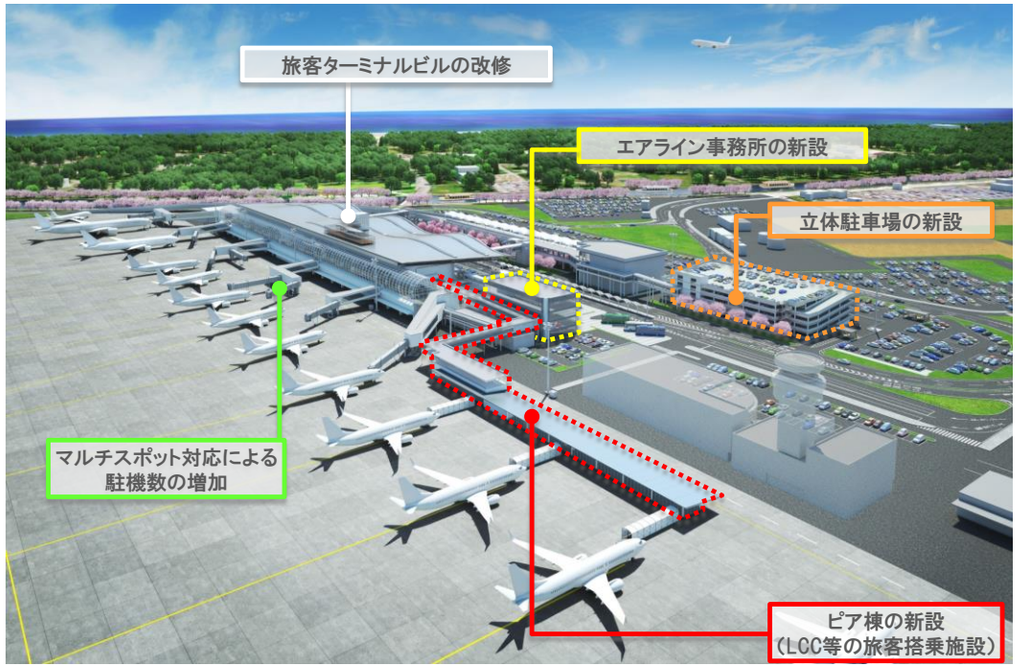
設備投資総額　341.8億円

空港の機能維持を目的とする設備投資の総額

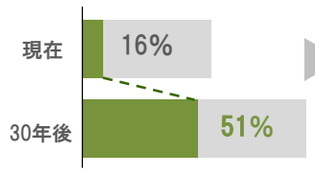
30年間の設備投資総額：195.1億円

空港活性化を目的とする設備投資の総額

30年間の設備投資総額：146.7億円



旅客数におけるLCC旅客数割合



実現のために必要な対応

旅客数の増加に対する施設機能増強
LCC等が新規に就航しやすい施設の利用料金設定

将来の空港イメージ

ピア棟の新設（旅客搭乗施設）

- ピア棟の新設により搭乗ゲートを増設
- マルチスポット対応による駐機数の増加
- 固定搭乗橋を設置しないことにより、エアラインが負担する搭乗橋使用料を削減し、LCC等の新規就航を喚起

旅客ターミナルビルの改修

- 東北ブランドを発信する物販や飲食等の商業店舗の拡充
- 保安検査場通過後エリアの店舗の拡充
- 安心かつスムーズな搭乗をサポートする設備機能の増強
（サイン・フライトインフォメーションボードの改修、保安検査場待ち時間表示システムの導入等）
- 総合案内所の機能の増強
（外国語対応・観光案内・二次交通案内やチケット販売等）
- 地域住民の方々等のための交流プラザやお迎えの方や到着旅客のためのアライバルカフェ設置

将来の空港イメージ

① 旅客ターミナルビル

- **商業エリアの大幅な拡張**
  - 商業エリアの大幅な拡張、ファサードやインテリアといった装飾の改修を実施し、空港利用者の利便性向上、賑わいの醸成、空港の活性化を推進。
- **震災学習ツアーの起点となる施設**
  - マルチメディアウォールでの映像コンテンツの放映や、ステージのある交流プラザ、修学旅行生等への講義用のレクチャールームを整備し、震災学習ツアーの起点・終点としての機能を確保。

② マルチモーダルハブの構築

- 航空と地上交通との結節点として、複数の地上交通モード機能と情報発信機能を集約。
- 総合案内所の機能を増強し、観光情報や二次交通等の情報など多様なサービスを提供。

③ ピア棟

- 旅客ターミナルビル西側にピア棟を新設し、国内線出発ゲートを 3 ヵ所増設することで旅客や便数の増加に対応。

④ 事務所棟

- 空港会社やエアラインの事務所機能を拡張するため、新たに事務所棟を整備。

⑤ エプロン

- 便数の増加に対応するため、スポットのレイアウトを変更。エプロンの大きさは変更せず、効率的なエプロンの運用を行うことで駐機数を増強。
- さらなる便数の増加に備えて、搭乗橋使用ゲートの一部にマルチスポットを採用し、駐機数を増強。マルチスポットの運用に合わせて固定橋の拡張・搭乗橋の増設・移動を実施。

⑥ 空港駐車場

- 第二駐車場の拡張や第一駐車場における立体駐車場整備等、利用者の増加に合わせて収容力を増強。
- ホームページから予約可能な予約専用駐車場、多様な料金設定等、利用者のニーズに対応可能なサービスや設備を整備。
- 第一駐車場の出入口ゲート増設などを行い、繁忙期の外周道路の渋滞緩和を推進。

⑦ 桜の植樹と周辺との連携

- 旅客ターミナルビル前面に桜等の植樹を行い，東北の四季を感じる空港を演出。
- 周辺自治体等が実施する整備事業等と連携し，地域との共生を推進。

長期的な構想

⑧ エアポートホテル

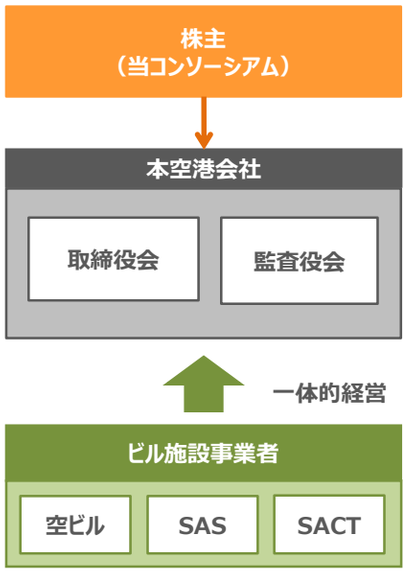
⑨ 貨物ビルの増設

3. 高いサスティナビリティの実現

事業実施体制

長期安定的なガバナンスの構築

- 地域の有識者の知見を活かすガバナンス
- 普通株式を長期保有
- ガバナンス・安全管理体制の一元化



サスティナビリティ 全ての事業活動の基盤

空港運営を確実に引継ぎ
民間企業としての健全性を確保
しながら持続的成長を実現

- 安全・保安をすべてに優先する組織風土
- 地域住民の方々との交流を促進し、地域とともに成長・発展
- 一人ひとりが変革の主役となり誇りとやりがいをもつ「働きたい空港」を実現

地域と共生する事業

●空港周辺への航空機騒音に対し、地域環境負荷の低減及び地域住民との相互理解構築のための取組について全事業期間にわたって継続

・環境負荷の低減
・空港周辺環境対策事業の継続実施（騒音対策等）
・桜の植樹活動等に対する実施支援

空港利用促進事業

●官民連携による航空ネットワークの拡充と地域間連携による航空需要拡大

●仙台空港国際化利用促進協議会（促進協）との連携（活動資金の拠出、促進協事務局業務の支援等）による地域の航空需要の創出

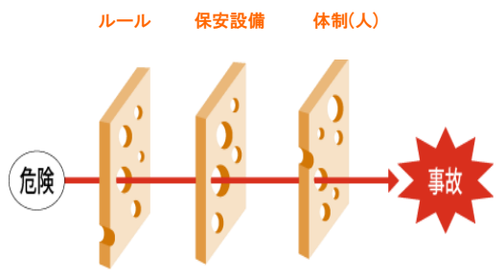
●東北地方が一丸となった広域観光の促進

・地域間連携による航空需要拡大

・仙台空港国際化利用促進協議会との連携した就航路線PR活動

安全・保安体制

- 代表企業の交通インフラ事業と連携した安全・保安体制
  - ・スイスチーズモデル（多面的な視点）によるモニタリングの実施
  - ・一次から三次までの複層的なモニタリングの実施
  - ・セルフモニタリングの実施による業務品質の確保
  - ・PDCAサイクルによる品質管理体制や業務の継続的な改善の実施



スイスチーズモデル：
事故発生のメカニズムと事故防止の安全体系として活用。
ルール、保安設備、体制（人）の安全対策を1枚1枚のチーズで表し、チーズに空いた穴（事故要因）が重なった時に事故が発生するという考え方を安全保安管理に利用。

- 社長直轄の「安全推進室」設置
  - ・保安業務の担当部門から独立した社長直轄部門
  - ・外部機関との協議・調整を一元的に実施
- 「仙台オペレーションセンター」創設
  - ・空港基本施設、旅客・貨物ターミナルビルの包括的・一体的な管理を実施
  - ・空港の安全運用のための航空保安、警備・防災、ファシリティマネジメント部門